

## 新口語訳「主の祈り」について

——比較言語的並びに教父神学的観点からの一考察

吉 田 聖

### まえがき

新しい口語訳『日々の祈り』が日本カトリック司牧司教委員会編集のもとに1993年9月に刊行され、家庭やグループ、教会、あるいは個人での幅広い活用と積極的な取組みが期待されている(「はじめに」参照)。カトリック教会の伝統的な祈りの表題「主禱文」は「主の祈り」と改訂され、祈りの言葉も(1)口語、(2)文語の順に併記されている。

ところが、最近、この新口語訳「主の祈り」をめぐる、青年層から高年齢層に至るまで、信徒から6件、司祭から1件、『カトリック新聞』の「声」欄に投書(賛否両論や疑問など、後述)が寄せられている。このことは、新口語訳「主の祈り」に関心がある証拠で歓迎すべきことだが、同時に、新口語訳には問題点があるというしるしではないだろうか。ところが編集担当のカトリック司牧司教委員会の名でのこの投書に対する回答は、1994年9月下旬現在、『カトリック新聞』紙上にはない。ただ一度、雨宮師(東京教区司祭という名で)の「質問に答えて」という文書が同紙に掲載されただけである。そこで、新口語訳「主の祈り」を再検討してみようと思いたち、関係資料を収集し、本稿を作成することにした。

「信仰の現場」からの信徒の疑問や問題に、神学者たちが地道な研究活動をもって協力することで、日本の教会にも「日本独自の神学」、即ち、Contextual Theology(「現場の神学」、仮訳)が生まれることが望まれる。これは、この春南アの国民にアパルトヘイト〔人種隔離政策〕廃絶と全人

種一人一票制の総選挙を実現させた、国民の精神的指導者の一人、アルバート・ノーラン師が提唱している「自国民のための神学」である<sup>1)</sup>。今回の私の研究は、その意味でも、日本の教会が直面している「主の祈り」の翻訳をめぐる考察として、小さな一歩ではあるが、時宜を得たものではないかと思う。

## 1. 「主の祈り」の歴史的側面。

### 1.1. 聖書のギリシャ語原文とその日本語訳（基礎資料）。

「主の祈り」は、周知の通り新約聖書の中では、2つの形で記されている。すなわち、1つはルカ福音書11:2b~4に見られる「短い形」、もう1つはマタイ福音書6:9b~13の「長い形」であり、教会の典礼で慣用されるようになったのは、マタイのものである。

聖書のギリシャ語原文に基づいた2つの形の「主の祈り」と正確な翻訳（新共同訳）の比較。

(ルカ 11, 2b~4)

Πάτερ <sup>†</sup>,  
ἀγιασθήτω τὸ ὄνομά σου·  
ἔλθέτω ἡ βασιλεία σου<sup>†</sup>·  
3 τὸν ἄρτον ἡμῶν τὸν ἐπιούσιον ἴδου ἡμῖν (τὸ  
καθ' ἡμέραν)<sup>†</sup>.  
4 καὶ ἄφες ἡμῖν (τὰς ἁμαρτίας)<sup>†</sup> ἡμῶν,  
ὡς καὶ γὰρ αὐτοὶ ἴκασιν ἅπαντι ὀφειλόντι  
ἡμῖν<sup>†</sup>.  
καὶ μὴ εἰσενέγκῃς ἡμᾶς εἰς πειρασμόν <sup>†</sup>.

(ルカ 11, 2b~4)

父よ  
御名が崇められますように。  
御国が来ますように。

(マタイ 6, 9b~13)

Πάτερ ἡμῶν ὁ ἐν (τοῖς οὐρανοῖς)<sup>†</sup>.  
ἀγιασθήτω τὸ ὄνομά σου·  
10 ἔλθέτω ἡ βασιλεία σου·  
γενηθήτω τὸ θέλημά σου,  
ὡς ἐν οὐρανῷ καὶ ἐπὶ τῆς γῆς·  
11 τὸν ἄρτον ἡμῶν τὸν ἐπιούσιον δός ἡμῖν σήμερον·  
12 καὶ ἄφες ἡμῖν (τὰ ὀφειλήματα)<sup>†</sup> ἡμῶν,  
ὡς καὶ ἡμεῖς ἴκασιν ἅπαντι ὀφειλέταις ἡμῶν·  
13 καὶ μὴ εἰσενέγκῃς ἡμᾶς εἰς πειρασμόν,  
ἀλλὰ ῥύσαι ἡμᾶς ἀπὸ τοῦ πονηροῦ.<sup>†</sup>

(マタイ 6, 9b~13)

天におられるわたしたちの父よ  
御名が崇められますように。  
御国が来ますように。  
御心が行われますように、  
天におけるように地の上にも。

わたしたちに必要な糧を  
毎日与えてください。

わたしたちの罪を  
赦してください。

わたしたちも自分に負い目の  
ある人を皆赦しますから。

わたしたちを誘惑に  
遭わせないでください。

わたしたちに必要な糧を  
今日与えてください。

わたしたちの負い目を  
赦してください、

わたしたちも自分に負い目の  
ある人を赦しましたように。

わたしたちを誘惑に遭わせず、  
悪い者から救ってください。

シュールマンの研究によれば、この2つの異なる形の「主の祈り」は、2度、別々な形でキリストが弟子たちに教えたのではなく、2人の福音記者が、共通の「古い伝承をギリシャ語に訳した資料」から取ったものである。マタイは当時の典礼文として唱えられていた形に合わせたとも考えられる。聖書の文献に関する研究資料は枚挙にいとまがないほどたくさんあるが、本論文はそれが直接の関心事ではないので割愛する。今回は、マタイによる「主の祈り」の訳語について、まずはギリシャ語原文とその翻訳を基礎資料とした。英語や他の言語をもとにしての議論や個人的な感想は多種多様であり、正確な意味を理解するためにあまり役立たないと思う。ここでは、聖書的な解釈についてはシュールマン他<sup>2)</sup>を参考にしながら、随時コメントの形で挿入していく〔後述の3.1. (A)-2参照〕。

## 1.2. 教会における個人的、共同体的使用の歴史的概観。

「主の祈り」は聖書に掲載されている、模範的な祈りである。カトリック教会は、これをどのように使用してきたかを歴史的に概観する。

### 1.2.1. 「主の祈り」を個人的に祈る。

ユダヤ教から改宗したキリスト教徒はユダヤ教の日々の祈りの伝統を受

け継いで、集会のときの共同の祈りだけでなく、家でも独りでまたは家族とともに、詩編を唱えたり、「朝の祈り」「夕の祈り」や食卓の祈りをする習慣があった。教会がとくにキリスト信徒に祈るように勧めたのは、キリストご自身から教わった「主の祈り」であった。

すでに1世紀後半に、つまり使徒たちの頭であったペトロやパウロの死後30年くらい経過した段階で(西暦50~70年ころ)、小アジアのシリアかアンチオケあたりでギリシャ語で書かれた『ディダケ<sup>3)</sup>』の中にマタイの伝承に酷似している「主の祈り」がのっている。

その第8章「断食と祈りについての教訓」中の2節には「偽善者のように祈るべきではなく、主がその福音のなかで命じたもうたように祈るべきである」という戒めのあとに「主の祈り」が記され、さらに末尾には「力と栄光は限りなくあなたのもの」という栄唱が続き、同3節には「このように日に三度祈るべきである」とある。

以上のことから、教会は信徒に毎日少なくとも3度「主の祈り」を唱えるように求めていたことがわかる。すでに3世紀ころの教会教父たちのなかで、たとえばテルトゥリアヌスは「主の祈り」を「全福音の要約」と呼んでいる(De Oratione c. 1)。251年頃、アフリカのカルタゴの司教殉教者であるキュプリアヌスは、その著『主の祈りについて』の中で次のように述べている。「これほど短い言葉のうちに、何と多くの偉大なことを、簡潔にしかも霊的に豊かに、何事も見逃すことなく、わたしたちの祈りや願いに関する神の教えを要綱のようにまとめたものが、他にあるだろうか<sup>4)</sup>」。キュプリアヌス以後「主の祈り」について言及している人は多い。アウグスティヌス、アルベルトゥス・マグヌス、トマス・アクィナス他、現代に至るまで多種多様の著作があるが、本論文では私の長期研究課題としている教父キュプリアヌスの教えを中心に考察していくことにする。

### 1.2.2. 「主の祈り」を共同体として祈る。

「朝の祈り」と「夕の祈り」に「主の祈り」が導入されたのは、西暦517

年の教会会議からである。聖体祭儀（ミサ）中に唱える「主の祈り」について、テルトゥリアヌス（De oratione 18）やキューリアヌス（Ep. 65, 2; 『主の祈りについて』第2章）も言及しているが、確実に述べているのはエルサレムのキリルス（Cat. myst. V, 11）である。

当時の聖体祭儀中の典礼文は、アウグスティヌス（Ep. 149, 16）によれば、ほとんどすべての教会において、「主の祈り」をもって終わっている。現在のように奉献文の直後に「主の祈り」が置かれるのは、ビザンティン式典礼に倣ってグレゴリウス大教皇によりローマ式典礼に導入されたものである。

パウロ6世教皇による『ミサ典礼書』では「われらを悪より救いたまえ」の後の「アーメン」を省略し、「主の祈り」と関連した一定の副文「慈しみ深い父よ……」を付け、その末尾に「国と力と栄光は限りなくあなたのもの」という賛美の応唱を加えたのである<sup>5)</sup>。

「主の祈り」は以上の通り、公の祈りにおいても重要な役割を果たしてきた。教会は「主の祈り」を毎日唱えることを、受洗者に求めた。洗礼の前に行われた試験では、「信仰宣言」（クレド）と「主の祈り」の書が手渡され、暗記することが求められた。そして、聖土曜日（聖土曜日の徹夜祭の典礼の中で洗礼式が行われ、受洗者はそこで初めて「主の祈り」を公に唱えたのである<sup>6)</sup>。

## 2. 日本の教会と「主の祈り」の翻訳例。

日本のカトリック教会の歴史は、1549年フランシスコ・ザビエルの来日以降、約445年を経過したが、来日後40数年で最初の「主の祈り」ができていたのは驚きである。その後、聖書が度々日本語に翻訳されて、今日に至っている。そこで、今回、日本語に翻訳された聖書の中から、「主の祈り」を選択して列挙し、訳語の相違点を概観しながら、新口語訳の問題箇所について批判的考察を加えてみたいと思う。

## 2.1. 新口語訳「主の祈り」(1993年, カトリック教会の最新版)

太字部分の2箇所が, 主な問題箇所として, 次の投書で指摘されている。

「天の父よ, み名が尊まれますように。

み国が来ますように。

み旨が天と同じく地でも行われますように。

わたしたちの日ごとの糧をきょうお与えください。

わたしたちが人をゆるすように,

わたしたちの罪をおゆるしてください。

わたしたちを誘惑に陥らせず,

悪からお救いください。アーメン。」

## 2.2. 問題提起: 新口語訳「主の祈り」に関する投書例。

『日々の祈り』刊行後, 『カトリック新聞』の「声」欄には新口語訳「主の祈り」について種々の投書があった。1994年9月下旬までのものを, その「表題」〔所属教会, 氏名(年令), 掲載月日〕, 論旨(紙面の都合で筆者がまとめたもの)の順に配列することにした。詳しい投書内容(全文)は, それぞれの脚注を参照されたい。

### 2.2.(1) 「新しい祈禱集『日々の祈り』に期待」

〔東京・下井草教会・中村吉基(25歳), 『カトリック新聞』1993年12月5日号〕。

論旨: 今回の刊行を歓迎する。「主の祈り」の訳は独自の新訳であるならば, エキュメニカルな立場での訳を検討してみてもどうか<sup>7)</sup>。

### 2.2.(2) 「聖歌, 祈禱文の口語訳について」

〔長崎・俵町教会・鎌田晴公(72歳), 『カトリック新聞』1993年12月19日号〕。

論旨: 何でも分かりやすい口語にすればいいという考え方には, 賛成し

かねる。主禱文の中の「我らを試みにひきたまわざれ」が「私たちを誘惑に陥らせず」となっている。新共同訳聖書でさえ、誘惑とは訳していないのに、どうして最先端の解釈をするのか<sup>8)</sup>。

### 2.2.(3) 「『主の祈り』口語文についての疑問」

〔福岡市・秋吉俊男（年齢不記載）、『カトリック新聞』1994年2月20日号〕。

論旨：「試み」とは、そのあとの言葉が「給わざれ」と敬語になっていることもあり、神からの試練と受けとめてきた。……しかし「誘惑」は悪へのいざないであるから、悪魔からのもの。翻訳は昔の原文に忠実なのがよいか、その精神を現代に合わせて正しく伝えるのがよいかと言う難しい点があるが、ほんとうに大事なことと思うので、ぜひしかるべき方の御教授をお願いする<sup>9)</sup>。

以上の投書に対して、兩宮師（東京教区司祭）の回答が、同じ2月20日号に一度掲載されている。調べてみたところ、兩宮師は、聖書学担当の上智大学助教授（51歳）と判明したが、日本カトリック司牧司教委員会の委嘱委員なのか、その関係はどこにも明記されていなかった。彼の回答については後述するので、取りあえず、文書名だけ、ここに掲載しておこう。

### 2.2.(4) 「質問に答えて」

〔兩宮師（東京教区司祭<sup>10)</sup>〕。

### 2.2.(5) 「主の祈り口語文に対する疑問」

〔福岡・今村教会・平田松雄（75歳）、『カトリック新聞』1994年3月27日号〕。

論旨：兩宮神父の詳しい答えは、小理屈のようでよく分からない。口語訳の祈りの言葉はたいへん幼稚になった。……「主の祈り」の最後にアー

メンを唱えなくなったことに対して、ぜひ説明をしてもらいたい<sup>11)</sup>。

## 2.2.(6) 「主の祈りの口語訳に敬語を使用して」

〔長崎・俵町教会・鎌田晴公（年令不記載）、『カトリック新聞』1994年3月27日号、上記(2)と同一人物〕。

論旨：「誘惑」という言葉は普通、日本では男女の良くない関係や、せいぜい金に目がくらんだり、地位をほしがったりして罪を犯すくらいのところまでを指すようで、日常あまり使わない言葉だ。「試み」の方は、もっと意味が広く、……宗教的だ。……日本の信者は恐らく百年以上も「試み」と祈ってきた。二つの立場がとられるのならば、昔の通り、誘惑でなく試みの方を入れていただいた方が、毎日唱えている信者の励みになる<sup>12)</sup>。

## 2.2.(7) 「われらの父よ」

〔A. アレグリーニ神父（67歳）、ミラノ外国宣教会、『カトリック新聞』1994年4月24日号〕。

論旨：日本のカトリック信者は「天にましますわれらの父よ」という言葉に親しんでいるが、司牧司教委員会が編集した口語の「主の祈り」の冒頭のところで、「われらの」という表現が消えてしまった。マタイの原文にも、ヨーロッパのいろいろの言語の訳文にもその表現があるのに、なぜ、日本語の口語でそれが消えたのか。……物足りない感じや寂しい感じを持たざるを得ない<sup>13)</sup>。

## 2.2.(8) 「神に『あなた』でよいのでは」

〔宮崎・南宮崎教会・大川亀吉（73歳）、『カトリック新聞』1994年9月25日号〕。

論旨：現代語では、あなた、お前、君の3語だけが単数の2人称代名詞であるから、ほかに言いようがない。新共同訳聖書にも「あなた」が用いられている。祈りは、神と親しく友人のように対話すること。多くの信者



は「天のお父さま、あなたの御名がほめたたえられますように……」と祈っている<sup>14)</sup>。

以下、文語体で、「天にましますわれらの父よ」と「われらを試みに引きたまわざれ」と訳されていた2箇所を絞って、種々の文献を比較検討していく。

### 2.3. 「主の祈り」の日本語訳例と問題個所の比較検討。

聖書協会世界連盟(UBS)の発表によれば、世界中で翻訳された聖書の言語数が1993年12月末現在で2062に達した、という。1年間で44の新しい言語の聖書が誕生したことになるとのこと(『カトリック新聞』1994年2月27日号参照)。

ここで、すでに日本語に訳されている「主の祈り」について考察を進めるにあたり、主な日本語の翻訳例を選択して、以下の通り、年代順に並べてみることにした。なお、正確を期するため、本文中に( )付で読み方や漢字を、筆者自身が、必要に応じて原本を参照しながら補足することにした。本文中の太字部分については、後ほど比較検討し〔 〕の部分は解説する。

#### 2.3.(1) 日本のキリシタン訳(1592年頃)

「どちりな・きりしたん」(バチカン本)<sup>15)</sup>。

「ばあてるのすてるのおらしょ」[Pater nosterのOratio]という表題のもとに、「主禱文」が載っている。

てん(天)にましますわれらが御おや(おん親)、

御名(みな)をたつとまれたまへ、

御代(みよ)きたりたまへ。

てん(天)におひてごおんた一での〔おぼしめす〕ままなるごとく、

ち（地）におひてもあらせたまへ。  
われらが日々（にちにち）の  
御（おん）やしなひを今日（こんにち）  
われらにあたへたまへ。  
われら人にゆるし申（もうす）ごとく  
われらがとがをゆるしたまへ。  
われらをてんたさんに  
はなし玉（たま）ふ事なかれ。  
我等をけうあく（凶悪）よりのがしたまへ。あめん。

### 2.3.(2) 明治訳（明治13年，1880年）

『新約全書』という表題<sup>16)</sup>。

天に在（まし）ます我儕（われら）の父よ  
願（ねがは）くは爾名（みな）を尊崇（あがめ）させ給へ  
爾國（みくに）を臨（きた）らせ給へ  
爾旨（みこころ）の天に成（なる）ごとく  
地にも成（なさ）せ給へ  
我儕（われら）の日用の糧を今日（けふ）も與（あた）へたまへ  
我儕（われら）が罪を犯す者を我（わが）ゆるす如く  
我儕（われら）の罪をも免（ゆるし）たまへ  
我儕（われら）を試探（こころみ）に遇（あは）せず  
悪より拔出（すくひだ）し給へ  
國と權（ちから）と榮（さかえ）は窮（かぎり）なく  
有（たもち）たまふ所なり アーメン

### 2.3.(3) カトリック教会の文語訳（明治29年，1986年）

『公教会祈禱文』所収（オズーフ東京大司教制定）。

天にましますわれらの父よ、  
願わくは、み名のとうとまれんことを。  
み国の来たらんことを。  
み旨の天に行わるごとく、  
地にも行われんこと。  
われらの日用のかてを、今日（こんにち）われらに与えたまえ。  
われらが人にゆるすごとく、  
われらの罪をゆるしたまえ。  
われらを試みに引きたまわざれ、  
われらを悪より救いたまえ。（アーメン）。

### 2.3.(4) ニコライ（明治）訳（1901年）

日本正教会翻訳『我主イイスス ハリストスノ新約』。

天ニ在（イマ）ス我等ノ父ヨ、  
願（ネガ）ハクハ爾（ナンジ）ノ名ハ聖（セイ）トセラレ、  
爾（ナンジ）ノ國ハ来タリ、  
爾（ナンジ）ノ旨（ムネ）ハ、  
天ニ行（オコナ）ハルルガ如ク、  
地ニモ行（オコナ）ハレン、  
我ガ日用ノ糧ヲ今日（コンニチ）我等ニ與ヘ給ヘ、  
我等ニ債（オヒメ）アル者ヲ我等免（ユル）スガ如ク、  
我等ノ債（オヒメ）ヲ免（ユル）シ給ヘ、  
我等ヲ誘（イザナヒ）ニ導カズ、  
猶（ナホ）我等ヲ凶悪（キョウアク）ヨリ救ヒ給ヘ、  
蓋（ケダシ）國と權能と光栄（クワウエイ）ハ  
爾（ナンジ）ニ世世ニ歸（キ）ス、アミン。

### 2.3.(5) ラゲ (明治) 訳 (1910 年)

公教宣教師ラゲ訳『我主イエズス・キリストの新約聖書』。

天に在 (ましま) す我等の父よ、  
願 (ねがは) くは御名 (みな) の聖 (せい) と為 (せ) られん事を、  
御國 (みくに) の來 (きた) らん事を、  
御旨 (みむね) の天に行 (おこな) はるる如く  
地にも行 (おこな) はれん事を。  
我等の日用の糧を今日 (こんにち) 我等に與へ給へ。  
我等が己 (おのれ) に負債 (おいめ) ある人を赦す如く、  
我等の負債 (おいめ) をも赦し給へ。  
我等を試みに引き給ふことなく、却って悪より救ひ給へ、(アメン)。

### 2.3.(6) 文語 (大正) 訳 (1917 年)

米國聖書会社発行『改譯 新約聖書』。

天にいます我らの父よ、  
願くは、御名 (みな) の崇 (あが) められん事を。  
御國 (みくに) の來 (きた) らんことを。  
御意 (みこころ) の天のごとく、地にも行 (おこな) はれん事を。  
我らの日用の糧を今日 (けふ) もあたへ給へ。  
我らに負債 (おいめ) ある者を我らの免 (ゆる) したる如く、  
我らの負債 (おいめ) をも免 (ゆる) し給へ。  
我らを嘗試 (こころみ) に遇 (あは) せず、  
悪より救い出 (いだ) したまへ。  
欄外に付記 (異本十三の末に「國と威力と栄光とは、  
とこしへに汝のものなればなり、アメン」と云ふ句あり。)

### 2.3.(7) 口語（昭和）訳（1954年）

日本聖書協会発行『口語 新約聖書』。

天にいますわれらの父よ、  
御名（みな）があがめられますように。  
御国（みくに）がきますように。  
みこころが天に行われるとおり、  
地にも行われますように。  
わたしたちの日ごとの食物（しょくもつ）を、  
きょうもお与えください。  
わたしたちに負債（ふさい）のある者をゆるしましたように、  
わたしたちの負債（ふさい）をもおゆるしてください。  
わたしたちを試みに会わせないで、  
悪しき者からお救いください。

### 2.3.(8) 新共同（昭和）訳（1987年）

日本聖書協会発行『聖書 新共同訳』。

天におられるわたしたちの父よ、  
御名（みな）が崇（あが）められますように。  
御国（みくに）が来ますように。  
御心（みこころ）が行われますように、  
天におけるように地の上にも。  
わたしたちに必要な糧を今日（きょう）与えてください。  
わたしたちの負い目を赦してください、  
わたしたちも自分に負い目のある人を  
赦しましたように。  
わたしたちを誘惑に遭（あ）わせず、

悪い者から救ってください。

### 2.3.(9) カトリック教会の新口語（平成）訳（1993年）

日本カトリック司牧司教委員会『日々の祈り』所収。

天の父よ、

み名が尊まれますように。

み国が来ますように。

み旨が天と同じく地でも行われますように。

わたしたちの日ごとの糧をきょうお与えください。

わたしたちが人をゆるすように、

わたしたちの罪をおゆるしてください。

わたしたちを誘惑に陥らせず、

悪からお救いください。アーメン。

## 2.4. 日本語訳「主の祈り」についてのコメント。

### 2.4.1. キリシタン時代の日本語訳について。

キリシタン時代の「主禱文」は、ポルトガル語の入り交じった「和洋折衷」の訳文である。『ポルトガル語・日本語辞典』など皆無に等しかった当時、キリシタン関係者には、かなり外国語に精通した者がすでにいたことを窺わせるものである。翻訳作業の「苦心のあと」が偲ばれ、高く評価できる。

(1)神への呼びかけ。「父」のかわりに「おんおや（御親）」と訳し、敬語を伴った「親」という単語になっていることに注目したい。「父」という単語は、当時の訳語にはまだなかったのであろうか、あるいは当時の人々にとって、神にあてはめるのは適当ではなかったのであろうか。「親」という単語には、「父母」の意味も含まれているが、「おんおや」と敬称をつけて呼びかけている点で、「父上」「父君」等という表現よりも、温かみがある

ように思われる。なお現在、一般家庭などでの通常会話の相手として父親に向かって、「父よ」というような単語で呼び掛けたりはしない。口語訳としては、「お父さん」とか「お父さま」が適切ではないか。ギリシャ語原文の「アッパ」は子どもが親しみをこめていう言葉であり、日本では「パパ」がそれに近い言葉と言われているのだから。

(2)現在では「み国」と訳出されている単語が、「御代(みよ)」となっている。聖書の元の単語「バジレイア」では「王国・帝国」というふうな領土的な概念より「神の支配」を意味するものである。

(3)「和洋折衷」の例。現在では「み旨」と訳出されているのは、ラテン語 *Voluntas* に相当する単語であるが、本書掲載の写本(〔 〕付で併記した)では「おほしめす」と訳出している。それ以前の別の写本ではポルトガル語 *ヴォンターデ Vontade* に尊敬の意味の「御」(ご、と発音する)を頭につけ、「ごおんたあで」という形にしてある。

(4)同様な手法はもう一箇所ある。文語訳では「試み」と訳出されているポルトガル語 *tentação* (ラテン語 *tentatio*) を「てんたさん」とそのまま平仮名に直して使っていること。(3)(4)は苦肉の策ともいえるが、ここに翻訳の苦心と翻訳文の成熟過程の一端がうかがえる。

『公教会祈禱文』の文語体ができたのは明治 29 年(1896 年)、オズーフ東京大司教の制定によるものであるから、キリシタン時代の訳(1592 年)から数えると約 300 年経過している。新共同訳(1987 年)の完成までには、それから 100 年近く経過しているので、その間に日本語は確実に変わって来ている。いつまでも昔のまままでよいというわけにはいかない。

### 3. 諸外国語による「主の祈り」と問題個所の比較検討。

ラテン語担当教員として、教材づくりに「突撃インタビュー」をやったことがある。南山大学構内、研究室、食堂、通路などで出会った外国人の教員や留学生の協力を得て、「主の祈り」を取材録音したのである。その結果〔合計 15 か国語、ラテン語は単語の文法的説明付(以下の 3.1.(A)-2 参

照)を教材にして授業で使用したところ、聞いた学生たちはいっせいに驚きの反応を示すと同時に、祈りの発声や雰囲気にも興味や関心を抱き大好評であった。例えば、「同じ祈りがそれぞれの外国語で祈られている点で、キリスト教は国際的だなあと実感した」とか、「テキストなしで、いきなり頼まれても、たいていの人がこの祈りを暗記していることは驚きであった」とか、「みんな、真剣に祈ってるって感じで、祈りの雰囲気が出ていてよかった」、「自分には暗記している祈りなど一つもない」、「南山大に、これほど多くの外国人がいるとは驚いた」、などである。

そこで、諸外国語の翻訳を順番にみていくことにする。まず(A)ラテン語のテキスト、その文法的説明と聖書の解説。続いて、(B)英語、(C)フランス語、(D)ドイツ語、(E)イタリア語、(F)スペイン語<sup>17)</sup>。そして、(G)ポルトガル語についても、特に、「天の父よ」と「誘惑に陥らせず」の該当箇所について、どのように訳出されているか検討していく。音声・文献とも取材できた韓国語、ベトナム語、インドネシア語、インド(タミール)語などアジア系の言語については、今回は割愛することにした。

### 3.1.(A)-1. ラテン語。

Pater **noster**, qui es in caelis,  
Sanctificetur nomen tuum.  
Adveniat regnum tuum.  
Fiat voluntas tua,  
sicut in caelo et in terra.  
Panem nostrum cotidianum  
da nobis hodie,  
et dimitte nobis debita nostra,  
sicut et nos dimittimus  
debitoribus nostris,  
et ne nos inducas in **tentationem**,



sed libera nos a malo.

### 3. 1. (A)-2.

文法的説明は（ ）に、通し番号付の各単語の意味は「 」に入れてある。聖書に関する短いコメントは、主にシュールマンの解説による。〔 〕は筆者のコメント。

1. Pater=pater, tris, m. 父, (名詞。呼格・単数)「お父さん」, または「お父さま」〔日本語では、現在、父親に「父よ」と呼びかけない。シュールマンの前掲書には「父上」という訳語が載っているが、時代劇にしか使われないのではないかと思う〕。もともと、これはアラマイ語「アッパ」abba (ギリシャ語 hopater) の訳語。子どもが、肉親の父親に向かって呼びかける「パパ」に近い言葉。「あなたがたが子であることは、神が『アッパ、父よ』と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります」(ガラ4章6節)。「主の祈り」は、従って、父なる神に向かって、子である神イエス・キリストと心をつ一つにして、神である聖霊の助けによって行う祈り、「三位一体の神」において行う祈りである。
2. **noster**=noster, nostra, nostrum, (所有形容詞。男性・呼格・単数)。「わたしたちの」。父との関連で「わたしたちのお父さま」。この「わたしたち」で表されている共同体は、弟子たちだけではない。イエスの教えに心ひかれ、神を明らかに「父」と認め、救いのみわざにあずかる人々が「兄弟姉妹」となって、新しい共同体を形成するのである。しかし、イエスは弟子たちといっしょに神に祈るとき、「わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方」(ヨハネ20章17節)という特別の表現を用いて、父である神と彼の比類のない親密さと愛と従順を示している。
3. qui=qui, quae, quod. (関係代名詞。男性・主格・単数)+1 と関連。「~ところのもの」(普通、訳さなくてもよい)。
4. es=sum, esse, fui. (動詞。直説法・現在・2人称・単数)。「がある」

と「である」を表す単語。ここでは神についての存在を表す記述であるから、「おられる」とか「います」と訳す。

5. in = (前置詞。奪格支配)。「～に」[～において]

6. caelis = caelum, i, n. (名詞。奪格・複数) + 5 = 「天に」)

1～6. は「わたしたちの天のお父さま」とも訳出できる。「わたしの天の父の御心」(マタ 12:50, 新共同訳参照)。「天にいます」という表現自体は、マタイがユダヤ人の祈り方に同化しようという意図から追加したもの。ルカは端的に「父よ」(「お父さま」)。

7. sanctificetur = sanctifico, are. (動詞。受動・接続法・現在・3人称・単数)「崇められますように」「聖とされますように」という願望形。「神が偉大にして、神に栄光あれ」という願いは一切のことに先行する。

8. nomen = nomen, minis, n. (名詞。主格・単数)「名が」

9. tuum = tuus, a, um. (所有形容詞。中性・主格・単数) + 8 「あなたの」、すなわち「神の名が」「み名が」

10. adveniat = advenio, ire. (動詞。接続法・現在・3人称・単数)「到来しますように」「来ますように」という願望形。

11. regnum = regnum, i, n. (名詞。主格・単数)「国」と「支配」の二重の意味を持つ。イエスは、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と福音宣教を開始している(マルコ 1章 15節)。

12. tuum = cf. 9 と同形 + 11. 「あなたの」、つまり「神の国・支配が」または「み国が」。この「み国が来ますように」という願いは、終末における神の国の完全な到来を求める祈りである。

13. fiat = fio, factus sum, fieri. (動詞。接続法・現在・3人称・単数)「実現しますように」「行われますように」という願望形。動詞が強調され、文章の最初に置かれている。ルカには、この願いがない。前の願いに含まれているものと見なされているため。

14. voluntas = voluntas, atis, f. (名詞。主格・単数)「意志が」「みむねが」。「御心が」という訳語もある(マタ 12:50 参照)。

15. tua = cf. 9 (所有形容詞。女性・主格・単数)「あなたの」+14 つまり「神の意志・みむね・御心・お望みが」。この願いを祈る者は自分が神のみむねを行うことができるように、神の恵みの助けを願い求めるのではない。神ご自身が、そのみわざにつき、みむねを貫徹してくださるよるといふ望みを表明するのである。
16. sicut = (副詞)「～のように」「～のごとく」
17. in = cf. 5 「～に」「において」+18
18. caelo = cf. 6 (名詞。奪格・単数)「天において」
19. et = (接続詞)「そして」「も」
20. in = cf. 17 「～に」「において」+21
21. terra = terra, ae, f. (名詞。奪格・単数)「地において」
22. Panem = panis, is, m. (名詞。対格・単数)「パンを」「食べ物を」「糧を」。動詞よりも、「糧を」という名詞を前にすえて強調している点で、他の願いとは異なる構文。生命を維持していくのに、なくてはならないものを求めるように、教えている。
23. nostrum = cf. 2 (対格・単数)「わたしたちの」+22
24. cotidianum = cotidianus, a, um. (形容詞。男性・対格・単数)+22 「日用の」「日毎の」。quotidianum とも書く。ここでは「必要な」という意味で理解されているギリシャ語「エピウスィオス」の訳。
25. da = do, dare. (動詞。命令・2人称・単数)「お与えください」
26. nobis = (人称代名詞。ego, mei. 与格・複数)「わたしたちに」
27. hodie = (副詞)「きょう」。最後に置かれて、強調されている。
28. et = cf. 19 「そして」「も」
29. dimitte = dimitto, ere. (動詞。命令・2人称・単数)「お赦してください」という命令形の願い。すべての人が、特に自分にとって唯一の救いは、慈悲深い神の赦ししかないことを知っている人々の願い。
30. nobis = cf. 26 「わたしたちを」
31. debita = debitum, i, n. (名詞。対格・複数)「負債を」= 「罪を」

32. nostra=cf. 2 「わたしたちの」+31
33. sicut=cf. 16. 「～ように」「～のごとく」
34. et=cf. 19 「そして」「も」
35. nos=cf. 26 (主格・複数)「わたしたちが」(強意)
36. dimittimus=cf. 29 (動詞。直説法・現在・1人称・複数)「わたしたちが赦します」+35。ギリシャ語からの訳では「赦しました」という過去形。赦しの祈りは、英雄的な態度、積極的な善良さ復讐心のない赦しを要請する。この態度は、神の赦しを得るための条件でもあり、またその果実でもある。
37. debitoribus=debitor, oris, m.(名詞。与格・複数)「負い目のある人々を」=「罪を犯した人々を」→単に「人を」
38. nostris=cf. 2 (与格・複数)「わたしたちに」+37
39. et=cf. 19 「そして」
40. ne=(接続詞)「～ないように」+42。「主の祈り」の中で、ここだけが、否定形の願望文になっていて、接続法の形 *inducas* が用いられている。
41. nos=cf. 26 (対格・複数)「わたしたちを」
42. inducas=induco, ere. (動詞。接続法・現在・2人称・単数)「あなたが引き込む、導く」+40. →「あなた(神)が導かないように」
43. in=(前置詞。対格支配)「～に」(方向を示す)
44. **tentationem**=tentatio, onis, f. (名詞。対格・単数)。日本語訳はこれまで、「試み」「いざない」「誘惑」と訳出している。「誘惑に陥らなぬよう、目を覚まして祈っていなさい」(マルコ 14章 38節)はイエスが死を迎える前の最後の警告。大きな誘惑や危険とは、キリストに躓くことであり、信仰を捨てることである。
45. sed=(接続詞)「かえって」「しかし」
46. libera=libero, are. (動詞。命令・現在・2人称・単数)「救ってください」。

47. nos=cf. 41 「わたしたちを」
48. a= (前置詞。奪格支配) 「～より」+49
49. malo=malum, i, n. (名詞。奪格・単数) 「悪より」。ギリシャ語の「ポネルー」には「悪」と「悪人」の二重の意味がある。「悪人」の中には誘惑の背後に、誘惑を起こすものとしてサタンや反キリストを擬人化して、見て取ることもできる。祈る者は自分のためにだけ祈るのではない。たえず危険にさらされている兄弟姉妹のために、祈ることを忘れてはならない。
50. Amen= (ヘブライ語。不変化語。英語: So be it!) 聖書の中では、「まことに」、「よくよく」などと副詞的に訳出されている場合がある。しかし、祈りの結語としては、訳さずに、「アーメン」と表記される。前掲の投書 (2.2.(4)参照) の質問に関連して付言しておけば、聖体祭儀中では、次に祈りの言葉が続くので「アーメン」は唱えない。「主の祈り」だけを単独で唱える場合には、「アーメン」をもって終わる。第2 ヴァティカン公会議後の典礼上の改定による。

### 3.1.(B) 英語

**Our** Father, who art in heaven,  
hallowed be thy name;  
thy kingdom come;  
thy will be done on earth  
as it is in heaven.  
Give us this day our daily bread;  
and forgive us our trespasses  
as we forgive those who  
trespass against us;  
and lead us not into **temptation**,  
but deliver us from evil. Amen.

3. 1. (C) フランス語

**Notre** Père qui es aux cieux,  
que ton nom soit sanctifié,  
que ton règne vienne,  
que ta volonté soit faite,  
sur la terre comme au ciel.  
Donne-nous aujourd' hui  
notre pain de ce jour.  
Pardonne-nous nos offenses,  
comme nous pardonnons aussi  
à ceux qui nous ont offensés.  
Et ne nous soumet pas  
à la **tentation**,  
mais délivre-nous du Mal.

3. 1. (D) ドイツ語

Vater **unser** im Himmel,  
Geheiligt werde dein Name.  
Dein Reich komme.  
Dein Wille geschehe,  
wie im Himmel so auf Erden.  
Unser tägliches Brot  
gib uns heute.  
Und vergib uns unsere Schuld,  
wie auch wir vergeben  
unsern Schuldigern.  
Und führe uns nicht  
in **Versuchung**,

sondern erlöse uns  
von dem Bösen.

3. 1. (E) イタリア語

Padre **nostro**, che sei nei cieli,  
sia santificato il tuo Nome.

Venga il tuo regno.

Sia fatta la Volontà  
come in cielo così in terra.

Dacci oggi il nostro pane  
quotidiano.

Rimetti a noi i nostri debiti,  
come noi li rimettiamo  
ai nostri debitori.

E non c'indurre in **tentazione**:  
ma liberaci dal male.

3. 1. (F) スペイン語

Padre **nuestro**, que estás  
en los cielos,

santificado sea tu Nombre,  
venga a nosotros tu reino,

hágase tu voluntad

así en la tierra

como en el cielo;

el pan nuestro de cada día

dánosle hoy,

y perdónanos nuestras deudas,

así como nosotros perdonamos  
a nuestros deudores,  
y no nos dejes caer  
en la **tentación**,  
mas líberanos del mal.

### 3. 1. (G) ポルトガル語

Pai **nosso**, que estais nos céus,  
santificado seja o vosso nome,  
venha a nós o vosso reino,  
seja feita a vossa vontade,  
assim na terra como no céu;  
o pão nosso de cada dia  
nos dai hoje,  
perdonai-nos as nossas offensas,  
assim como nós perdoamos  
a quem nos tem ofendido,  
e não nos deixeis cair  
em **tentação**,  
mas livrai-nos do mal.

### 3. 2. 投書で指摘された問題個所の翻訳の比較。

ここで列挙した前述の日本語訳[2. 3. (1)~(9)], および外国語訳の該当箇所を比較検討してみると, 次のような事実が明らかになる。

#### 3. 2. 1. 「われらの父よ」の「われらの」に関して。

「われらの」に相当する単語を省略しているのは, 前述の日本語訳9件の中では, 新口語訳(9)だけである。過去すべての日本語訳では「われらの」



または「わたしたちの」が訳出されている。

また諸外国語に関しては、(A) noster ; (B) our ; (C) notre ; (D) unser ; (E) nostro ; (F) nuestro ; (G) nosso ;

いずれにも、「わたしたちの」を意味する単語が訳出されている。

### 3.2.2. 「われらを試みに引きたまわされ」の「試み」について。

前述の日本語訳では、以下の通りの漢字をあてはめて訳出している。

[2.3.(1)] : 「てんたさんにはなしたまふ事なかれ」 キリシタン訳。

[2.3.(2)] : 「試探(こころみ)に遇(あは)せず」

[2.3.(3)] : 「試(こころみ)に引きたまわされ」

[2.3.(4)] : 「誘(いざない)に導かず」

[2.3.(5)] : 「試(こころみ)に引き給ふことなく」

[2.3.(6)] : 「嘗試(こころみ)に遇(あは)せず」

[2.3.(7)] : 「試(こころみ)に会わせないで」

[2.3.(8)] : 「誘惑(ゆうわく)に遭(あ)わせず」

[2.3.(9)] : 「誘惑(ゆうわく)に陥らせず」

一覧表の形に並べてみると、さまざまな漢字をあてて、訳語に苦心惨憺した努力のあとが窺える。発音だけを見てみると、「てんたさん」は別にして、「試探・試・嘗試」(こころみ)、「誘」(いざない)、「誘惑」(ゆうわく)の3種類の訳語しか出てきていないことが分かる。それぞれの語感や意味・内容は、時代の流れとともに変わるものである。また個人の認識によっても、微妙に異なる。『国語大辞典』(小学館、1981年)によれば、「試み：①こころみること。ためしに行うこと。ためし。試験。②雅楽を予習のために演ずること。③食事をする。またその飲食物。④試飲，試食をすること，また，そのもの。⑤計画。はかりごと。」とある。「誘い：さそうこと。誘う：さそう，勧める，また，勧めて連れて行く」。さらに「誘惑：さそって心をまどわすこと。悪事に誘いこむこと」となっている。前掲の

投書では「ゆうわく」に反対意見が集中していたが、男女間の性倫理の乱れや性に関する誘惑の多い世相を反映しているのであろうか。

また諸外国語では、「こころみ」に相当する単語を、3.1.(A)~(G)中より抜き出してみると、次のようになる。

(A・羅)：tentationem〔主格・単数=tentatio〕

(B・英)：temptation

(C・仏)：tentation

(D・独)：Versuchung

(E・伊)：tentazione

(F・西)：tentación

(G・ポ)：tentação

(D・独)のVersuchung以外は、(A・ラテン語)が語源になっていることが一目瞭然である。キュプリアヌス時代の「主の祈り」のラテン語では、temptationemという単語になっていて、英語の語源とそっくりである。(G・ポルトガル語)はキリシタンが当初は訳さずに、平仮名読み「てんたさん」として取り入れた単語だ。それも明治時代以降に「こころみ」「いざない」「ゆうわく」と訳出され今日に至っている。

#### 4. 教父神学、教会の教えに基づいた新口語訳の批判的考察。

この新口語訳は、冒頭の「聖書のギリシャ語原文の正確な翻訳」と比較検討してみれば、確かに「原文に忠実な訳」であるらしい。しかし、残念ながらこれは「カトリック教会の伝統や解釈を踏まえた翻訳」とは言いがたい「独自の訳」である。新共同訳とも異なるだけでなく、エキュメニズム(教会一致)に配慮して作られたものでもないし、プロテスタントの訳とも同じではない。この点が惜しまれる。「独自の訳」と判断した根拠を、以下の通り列挙する。

#### 4.2.1. 「主の祈り」はマタイの原文に基づいている。

いま話題にしている「主の祈り」は、ルカではなく、マタイに基づいている。ルカでは「父よ」だけで、むしろキリスト自身の教えられた形に近いものとされている。しかし、マタイのテキストの翻訳を論じるならば、他のすべての日本語訳、外国語訳が「天にましますわれらの父よ」という意味に訳出している箇所を、新口語訳だけが「天の父よ」として、「われらの」を省略してしまった。「にまします」は「の」と省略可能かも知れない。しかし「われらの」を意味する単語を省略したのは、単なる不注意とかミスではなく、意図的なものを感じる。なぜ「われらの」を口にはいけなくなったのか、だれかに遠慮したのか、何の説明もない。

実際、「み名」「み国」「み旨」と3回とも「み」（御という漢字が使われていた）という形で和訳されているが、これらは「あなたの」（所有形容詞・2人称・単数）という意味で、「神に関わることがら」について言われているのである。これとは対照的に、「わたしたちの」という1人称・複数形の単語が後半頻繁に使われているが、それはこの祈りの中で重要な役割を担っているからである。実際、新口語訳では「わたしたちの日ごとのかて」「わたしたちの罪」「わたしたちを誘惑に陥らせず」など「わたしたち」という言葉で必ず翻訳されている。冒頭の呼びかけの「わたしたちの父」という表現でも、この「わたしたちの」はあってもなくてもよいような飾り言葉ではないのである。

#### 4.2.2. 教父キュプリアヌスの教えに照らしてみよう。

キュプリアヌスによれば、「天にましますわれらの父よ」という呼びかけの中で、「われらの」という言葉が欠落すると、それはもはや「キリスト教徒の伝統的な祈りとはいえない」のである。彼は次のように、実面的に教え論している。

「愛する兄弟たちよ。わたしたちは神を『天にまします父』と呼ぶことに気づいて、それを悟るだけでなく、さらに『われらの父よ』と結び付け

て言うのです。つまり信じる者の父、彼によって聖とせられ、霊の恵みによる誕生（洗礼の恵み）によって、新たに神の子となりはじめた者の父なのです」、「わたしたちキリスト者が祈る時『われらの父よ』と唱える時、神はすでにわたしたちのものになり始めているのです」（第10章参照）。

「われらを試みに引きたまわされ、と祈る必要があると、主は論しておられます。この箇所では、事前に神のゆるしが無い限り、何もわたしたちに敵対するものなどない、ということを示しておられるのです。」（第25章参照）。

「誘惑に陥らないようにと祈る時、わたしたちは自分自身の弱さと無力なことを戒められて、そう祈るのです。だれも横柄に自分を誇ったり、傲慢に何かを自分のために求めたり取ったりすることなく、[信仰]告白においても、苦難においても、自分自身に光栄を帰することのないようにと願うのです」（第26章参照、脚注4参照）。

#### 4.2.3. ヨハネ・パウロII世の『新カテキズム』の教えに照らしてみても。

1992年10月、ヨハネ・パウロII世によって発布された『新カテキズム』の中に、「主の祈り」に関する項目がある<sup>18)</sup>。そこに簡潔にまとめられている関連箇所だけを根拠として紹介しておきたい。

424「われらの父よ」の「われら」は何を想起させますか。「われらの」は、イエス・キリストにおいて結ばれた新しい契約を思い出させます。この契約（新約）によって主キリストがわたしたちの神となり、わたしたちはかれの民となりました。また、わたしたちが至聖なる三位一体の各ペルソナとの交わりである教会の一員であることと、人間どうしの交わりである教会の一員であることをも思い起こさせます。[106, 107]

敢えてコメントするまでもないが、この個所の表題からして「天の父よ」

ではうまく説明できないので、従来の文語体「われらの父よ」が使われている。「われら」という単語には新しい契約、神の民、教会の一員、人間どうしの交わりなど、重要な内容が含まれている、という教えである。

432 第6の願い「われらを試みに引きたまわざれ」では何を願いますか。この願いによって、わたしたちが罪の道を歩むのを神がお許しにならないように祈ります。また「識別と剛毅の霊」(聖霊)を求め、警戒しつつ最後まで忍耐する恵みを願います。

「試練」と「誘惑」の訳し方について、ここでまとめて考えてみよう。「試練」「誘惑」の両方の意味を持つ「ペイラスモス」というギリシャ語の翻訳については、「ペイラスモス」(名詞)と「運び込む」(動詞)のどちらに解釈の出発点を置くかで「試練」か「誘惑」か解釈が分かれることなど、雨宮師は「誘惑」の立場を支持してくわしく説明している(脚注10参照)ので、ここでは繰り返さないことにする。

ギリシャ語からの説明は、確かに正しいことであるが、この言語に精通していない人には「小理屈で分かりにくい」ものに映るようだ(脚注11参照)。私も、従来の「われらを試みに引きたまわざれ」を「われらを誘惑に遭わせず」(新共同訳)ではなくて、「わたしたちを誘惑に陥らせず」という言葉遣い変えた点は、聖書に酷似した表現があるにせよ、そして「原語に忠実な訳」であるにせよ、随分、感じ方が異なるし、「誘惑」という語感には「度ぎつい」ように思う。現場の信徒の方々からも、口に出して唱えるには「誘惑」より「試み」のほうがよいのでは、という強い反対意見や疑問が出されている。グレンラーの解説によれば、「ためし」という訳語も適当ではないかと思われる(脚注10参照)。

## 5. 提言

1993年日本のカトリック教会に新口語訳「主の祈り」が登場して以来、

投書が寄せられ、いろいろな反響があった。実際、毎日、何回も個人的にまたは公に祈る大切な「主の祈り」について、関心の無い人はいないであろう。この度、この比較研究を通して学んだことは、日本語訳に関して、(1)聖書(「主の祈り」も含めて)の日本語訳が、実に多数あること、(2)明治・大正・昭和・平成と時代の流れとともに、その訳語が微妙に変わってきていること、(3)「主の祈り」など、公に唱える祈りの言葉について、より相応しい訳語を選定することの難しさも、改めて認識した。

### 5.1. 投書に対して

ここで、前掲の投書(2.2.(1)~(8)全文は脚注7~14参照)に対して、今回考察してきたことをもとにして、簡潔に私見を述べておきたい。

#### 5.1.(1) 「エキュメニカルな立場での訳を」という意見に対して。

カトリックとプロテスタントの大勢の学者が18年間もかけて翻訳した新共同訳は、日本における画期的な一大事業であり、真正正銘の「エキュメニカルな立場の訳」である。従って、各教会教派共同の集会や会議で使用する「主の祈り」は、新共同訳のテキストが最善策であると思う。

#### 5.1.(2) 「新共同訳聖書でさえ、誘惑とは訳していないのに」という発言に対して。

新共同訳聖書(1987年)では、マタイもルカもちゃんと「誘惑」と訳されている。「誘惑」の中身についての理解には個人差があるが、この訳語が「主の祈り」の中で何を意味しているのか、個人的な偏見に左右されずに、その内容を正しく理解することが大切である。

#### 5.1.(3) 「試みと誘惑の訳語の違い」についての指摘に対して。

本文中に詳述したので、繰り返さない。「翻訳は昔の原文に忠実なのがよいか、その精神を現代に合わせて正しく伝えるのがよいのか」という疑問

に対して一言述べておきたい。「異文化の受容」という観点からすれば、後者、つまり「内容を現代に合わせて正しく伝えること」に主眼をおくべきであろう。一例、「good morning!」という挨拶の言葉を何と訳すか。忠実に「よい朝!」と訳出したのでは、意味をなさない。やはり慣例上、「おはよう!」とすべきである。宗教用語はその背景説明を付加しないと、分かりにくい場合が多い。

5.1.(4) 「口語訳の祈りの言葉はたいへん幼稚になった」という発言に対して。大正生まれ(75歳)の平田氏の言葉遣いと、平成時代の言葉遣いは相当相違があることは否めないが、口語即ち幼稚だ、という受け止め方は、ひょろに短絡的な発想ではなかろうか。逆に、「祈りは文語体で、荘重に唱えなければならない」などと考えているとすれば、神を遠くの高台の上に祭り上げてしまう結果になりはしまいか。それは、イエスのいう「父である神」、親しみをこめて「お父さん」と呼びなさいと教えられたキリスト教の神とは、全く別のものになるのではないか。

また、同氏の主張「敬語を使え」という点に関連して一言。一般には、司教や司祭に対しては「〇〇司教様」「〇〇神父様」と「様」付けで呼ぶが、神に対しては「父よ」とか「神よ」と呼び捨てにしている。これはあべこべではないだろうか。司教や司祭には「司教さん」「神父さん」でいいのではないか。世々に至るまで生きておられる神に対しては「神さま」または「お父さま」が適当ではないだろうか。日常会話で今では使用しない「父よ」という単語や、呼び捨ての「神よ」という表現で、神を抽象化し、遠くの方に奉ってはいないだろうか。その意味で、現在使用中の典礼文は、この「呼称」の件に関して、改善の余地ありと痛感している。

5.1.(5) 「誘惑は日常あまり使わない言葉だ。試みの方がもっと意味が広く、宗教的だ……」という意見に対して。

本文中で検討したので、繰り返さないことにする。ただ「誘惑」のほうが日常よく耳にする、刺激的な言葉であることを指摘しておきたい。「試み」

は前掲の『国語大辞典』の説明をみても明らかなように、日常の使用回数は少ないように思われる。

5.1.(6) 「『われらの父よ』という表現が新口語訳では消えてしまった。物足りない感じや寂しい感じを持たざるを得ない」という意見に対して。

同感である。「マタイの原文にも、ヨーロッパのいろいろの言語の訳文にもその表現があるのに、なぜ、日本語の口語でそれが消えたのか」という彼の疑問が、今回の考察と本稿作成の動機となった次第である。

5.1.(7) 「神に『あなた』でよいのでは」という意見に対して。

全く同感である。この方は73歳であるが、前述の同年令の方のように「口語訳は幼稚だ」というような受け止め方はしていない。要するに、言語センスの問題は、年令ではないのだと思う。

5.2. 新口語訳「主の祈り」に対して。

5.2.(1) 「天の父よ」という訳語。

諸外国語の比較研究から明らかなように、掲載した羅・英・仏・独・伊・西・ポ・の全ての外国語では「われらの」に相当する単語が訳出されている。またとても重要な点としては、最近の『新カテキズム』の教えは無視できない。「この『われらの』は、イエス・キリストにおいて結ばれた新しい契約を思い出させる。この契約（新約）によって主キリストがわたしたちの神となり、わたしたちはかれの民となった。また、わたしたちが至聖なる三位一体の各ペルソナとの交わりである教会の一員であることと、人間どうしの交わりである教会の一員であることをも思い起こさせる」のである。従って、「われらの」を削除すれば、「新約」「神の民」「教会の一員」「神との交わり」「人間どうしの交わり」などといった大切な神学的内容を、完全に排除したことになる。



さらに、教父キュプリアヌスの教えに照らしてみても明らかなように、新口語訳による「天の父よ」という新訳は、「われらの」を削除したことによって、「洗礼の恵みによる神の子であること」を無視することになってしまう。キュプリアヌスの言葉によれば「『われらの父よ』と結び付けて言うのは、つまり信じる者の父、彼によって聖とせられ、霊の恵みによる誕生（洗礼の恵み）によって、新たに神の子となりはじめた者の父」と認めているからである。

以上の考察から、「天の父よ」という新口語訳は不適切であり、早急に改定すべきであると、提言しておきたい。

### 5.2.(2) 「試み」か「誘惑」かの訳語の問題。

過去の翻訳例の「ころみ」「いざない」「ゆうわく」の中から選択するならば、個人的には「ころみ」という訳語を支持したい。しかし、最近のラングラの解説に従えば、「ためし」という訳語も適当ではないかと思う。提言としては、「わたしたちを試(ため)しに遇わせないで」と訳せば、「わたしたちを誘惑に陥らせず」という文章より、穏やかな響きとなる。

### 5.3. 試訳「主の祈り」

最後に、今回の翻訳例の比較研究の成果として、試訳を掲載しておきたい。生きておられる神さまに向かって、「父君」「おん父」「父上」「お父さま」「お父さん」「父よ」「おやじ」「パパ」など、どの呼びかけの言葉を使うにしても、子どもならいざ知らず、大のおとなにとっては、照れくさいことだとか、適当な訳語がない、などと議論の余地は残る。諸外国語では「天にまします」の「まします」は3人称ではなく2人称を用いている点で、日本語では表現できない「親しみ」を表している。

ところで、投書(8)にもあったように、最近、共同体の中で自由な形で祈る時、神さまへの呼びかけとしてよく耳にするのが「お父さま」である。新・新興宗教用語のようで嫌いだという向きもあるかもしれないが、この

ほうが呼び捨ての形「父よ」よりも、丁寧で親しみやすい感じではないかと思う。

「天にいます、わたしたちのお父さま、  
み名が尊まれますように。  
み国が来ますように。  
み心が、天にも地にも、行われますように。  
私たちの必要な糧を、きょう、お与えください。  
私たちが人をゆるしましたように、  
私たちの罪をおゆるしてください。  
私たちが試しに遇わせないで  
悪よりお救いください。」

### あとがきにかえて

本稿をほぼ書き上げた時点で、『日々の祈り』編纂に関する鼎談が『家庭の友』10月号<sup>19)</sup>に初めて掲載されているのを見つけたので、補足的に、ここで取り扱うことにした。それは「特集・家庭で祈るとき」の2項目の記事として、「『日々の祈り』を編纂して」と題して、カトリック中央協議会出版部長・山本量太郎、カトリック司牧司教委員会秘書・阿野武仁、と編集部三者対談形式になっていた。誰が翻訳担当者であったのかは記事中にも記載されていない。『カトペディア』で調べたところ、山本師は東京教区司祭(48歳)、阿野師は長崎教区司祭(55歳)であった。『日々の祈り』が出て1年近く経過、利用者のほうからのいちばん大きな反応は、口語体の「主の祈り」についての問い合わせであったとのこと。阿野師は「主の祈りに関しては、少し問題があって、『日々の祈り』の中にあるものを、まだ公式には使うことができないようですが、いずれはこれも公式に使えるようになると思います」と述べている。公式に使えない理由について、「少し問題があって」と曖昧な表現でしか述べられていないが、その問題は早

めに解決できるのではないかと思う。その問題のひとつが、実は本稿で取り上げた個所、つまり「われらの」を削除して単に「天の父よ」と翻訳した「呼びかけ」の個所にあると思う。もし、そうでないとすれば、編集者には重大な見落としがあると言わざるを得ない。

また、実際の使用に関しては、ある司祭がこれを普及させようとしていたところ、「昨年の司教総会で、典礼の中で口語体の『主の祈り』を全面的に使ってもいいというわけではない、ということになりました……」と、山本師は述べている。これは、『日々の祈り』の中の新口語訳「主の祈り」には、そのまま典礼には使用できないほどの「重大な理由」があるということ、司教総会が事後承認したことになる。

そこで関連資料である『カトリック中央協議会・会報』を丹念に調べてみた。しかし、具体的な理由は記載されず、次のような決議事項だけが記載されていたに過ぎない——臨時司教総会（93年12月14日、日本カトリック会館において）による決議事項。決議4『日々の祈り』に掲載されている「主の祈り」を典礼に使用する件。

『日々の祈り』に掲載されている「主の祈り」（口語）の典礼での使用を、次の場合において承認する。(1)子どもとともに捧げるミサにおいて。(2)状況によって口語がより適合すると考えられる場合。(以上、『カトリック中央協議会・会報』1994年1月号3頁参照)

この決議事項をみる限り、(1)「子どもとともに捧げるミサにおいて」使ってもよいとはどういう意味か、よくわからない。子どもには文語体より確かに分かりやすいに違いない。ちなみに、最近出版された子ども向けの本、ロイス・ロック作、いむらかつこ訳『こどものためのしゅのいのり』（女子パウロ会、1994年9月）には、新口語訳がそのまま取り入れられ、一句づつ説明文がつけられ、末尾には口語・文語の順に「主の祈り」がまとめて掲載されている。「新口語訳は、まず子どもから」という方針ならば、これは適切な処置だと思う。

(2)「口語がより適合すると考えられる場合」とは具体的にどういうケースであろうか。現行のミサ典礼文は文語・口語の「混合使用」である。これをおかしいと感じなくなって改訂しないならば、問題である。すでに、文語・口語の混合使用状態にあるのだから、「口語がより適合する」場合など別にあるとは思えないし、この決議事項は新口語訳「主の祈り」だけが典礼中に使えない理由の説明にはなっていない。

そこで、『日々の祈り』他、新祈禱書編集作業グループ（責任者・深堀敏司教、森山勝文師、山本量太郎師）の中の一人、森山師に9月28日、司教総会（93年12月14日開催）での本件に関する経緯について問い合わせたところ、大略、次のような背景説明があった。

(1)新口語訳「主の祈り」は日常的、個人的使用として位置づけられている。個人的に祈るときに、日本語の「わたしたちの」とか「われらの」は煩雑過ぎるので、「天の父よ」という新訳が試みられた。「わたしたち」「あなたがた」など人称代名詞は、日本語ではあまり使わずに、できれば省略する傾向がある。「天の父よ」にも当然「わたしたちの」という意味が含まれているものとする〔主語なしに話せるのも日本語の特徴とか〕。

(2)「われらの」を削除している点で、ミサなど「典礼式文」としては、使用を控えたほうがよいという了解がなされている。典礼式文としては、「わたしたちの天の父よ」という形での使用が考慮されている。

(3)子どもたちには、文語体よりもわかりやすく、親しみやすいので、説明を加えれば「典礼式文」として使用しても差し支えない。

(4)「口語がより適合すると考えられる場合」とは、たとえば家庭集会や小グループなどで、打ち解けた雰囲気での使用のことである。

(5)外国語と日本語のセンスの違いで「わたしたちの」というと、すぐ日本語では「あなたがたの」が連想される。そこに不必要な区別や緊張、壁などが生じる危険があるので、少数派であるカトリックは「わたしたちの父よ」とことさら、「わたしたちの」を強調しないほうがよいと考える人もいたようだ。

以上のような森山師からの背景説明を聞いて、「天の父よ」の個所で私の指摘した点が的中していたこともあって、ある程度納得できた。いずれにせよ、日本のカトリック教会が時代とともに進歩発展していくために、祈りの本の改訂は不可欠である。だが、よい祈りの本があれば、よい祈りができるとは限らない。「カトリック中央協議会が、日本の教会をリードする必要はない。……いままでの祈禱書のイメージを変えようと工夫しているが、信者の皆さんのほうが保守的で、儀式書というイメージのものを求めている」という山本師の意見には、今回の「主の祈り」の翻訳上の問題個所を含めて、自己弁解的な印象を受けた。

## 注

- 1) アルバート・ノーラン著、吉田聖詔『南アフリカにいます神』南窓社1993年参照。この本の中で、著者は「コンテクスチュアライゼーション」という単語を導入して欧米の既存の神学ではなく、自国民のための、独自の神学を模索している。「状況神学」と訳出すると、「状況倫理」神学と混同しやすいので、あえて「現場の神学」という耳慣れない訳語を考案し、区別することにした。
- 2) ハインツ・シュールマン著『キリストの教えた祈り』南窓社1967年参照。「主の祈り」の構成については、『新カテキズム』もそうだが、「7つの願い」から構成されているという解説が多い。森一弘司教はその著『信徒の霊性』（女子パウロ会、1988年8月）の中で「主の祈り——信徒の祈りとして」という項目を設け、そこで願い事は「最初の3つは神に向けられたものであり、後半の4つは人間のためのものである」と説明している。さらに、彼は「神の名——糧——悪」を中軸にすえ、「神の名——悪」「み国——誘惑」「み旨——ゆるし」と両者をそれぞれ一対のものとして直結させた、ユニークな構造図と解説を掲載している（159頁参照）。R. G. グレンラーの解説によれば、6つとなっている。新しい時代を生き抜くために、終末思想の観点から前半は「み名・み国・み旨」の3つ、後半は「糧・ゆるし・誘惑」の3つで、合計6つの願いとなる、としている。

「主の祈り」全体の解説として、グレンラーの解説(R. G. Gruenler, *Lord's Prayer*. Cf. Walter A. Elwell, *Evangelical Dictionary of Theology*, Baker Book House1984.)を翻訳し、概観しておきたい。

I. 父の栄光を求め、父に対して行う願い。

導入の「天にましますわれらの父よ」という言葉で「神の家族」——この地上の過ぎ去る価値を超えたもの——に対するイエスと信徒の間の「緊密な関係」を認識するのである。

第1の願い。「み名の尊まれんことを」。この祈りは世界におよぶ「神の支配」を認め、終末思想の「新しい時代」にあって、人間側の応答と最終的な完成を先取りする（ロマ10:13, 15:9, フィリ2:9~11参照）。

第2の願い。「み国の来たらんことを」。この祈りはイエスが始めた神の支配の「すでに」成就した面と「未だに」の完成していない面の間にある「終末思想的な緊急性」を維持し続行することを確認する。

第3の願い。「み旨の天に行わるごとく、地にも行われんことを」。この祈りは最初の二つのいまだに成就していない願いの「拡張」である。神の支配の究極の目標を提示し、その完成を祈る「信徒の役割の重要性」を説いている。

II. 人間の必要なものを神に願う。

第4の願い。「われらの日用の糧を、こんにちわれらに与えたまえ」。ここでは、毎日の糧だけではなく、「救い主と宴」を前もって味わうことにも注目しているのである。

第5の願い。「われらが人にゆるすごとく、われらの罪をゆるしたまえ」。ここでのポイントはマタイ6:1~21までの「施し・祈り・断食など」広範囲なテーマに適應する、キリスト教徒の「相応しい態度」すなわち「ゆるし」についての指摘である。マタイ6:14~15の「主の祈り」の言葉の意味は「人をゆるそうとしないかぎり、その人は神からのゆるしをえられない」ということである。

第6の願い。「われらを試みに引きたまわざれ、われらを悪より救いたまえ」。ここで「試み」と訳出されているギリシャ語ペイラスモスは「ためすこと」（テスト）を意味する単語である（ルカ22:28, 1ペト1:6参照）。新約聖書ではたびたびトリプシス「苦難」という意味で用いられている（ヨハ16:33, ロマ12:12参照）。この言葉は単に「現在」のことだけでなく、「未来」の終末思想的なことから、つまりすべてが終わりを迎える時の「最後のためし」に関することも示している（マタ24:21, マコ13:24, 1ペト4:12参照）。マタイの原文は「われらを悪い者（悪魔ないしは反キリスト）から救いたまえ」という意味に翻訳することもできる。この願いには終末思想的な緊張がみなぎっている。というのも、敵の占領地域に神の支配を開始するということは、イエス自らにとっても、またその弟子たちにとっても、最後の最後まで、「ためし」となり苦難となるということをイエスは熟知していたのである。（補足。この最後の願いを、前半と後半で分割すると、7つの願いになるわけである。また、「主の祈り」に付随している「栄唱」については、通常、「国と力と栄光は限り無くあなたのもの」という短い応答の句のことであるがこれを伴って結びとする習わしがあるにはある。この句はオリジナルなテーマと合致してはいる

が、多数の写本伝承によれば、最初からのものだという証明は十分にはなされていない。)

- 3) 『ディダケ』のギリシャ語の「主の祈り」のテキストは下記の文献(87頁)参照。  
Kurt Aland, *SYNOPSIS QUATTUOR EVANGELIORUM*, locis parallelis evangeliorum apocryphorum et patrum adhibitis edidit. Editio quinta. Wurttembergische Bibelanstalt Stuttgart, 1968. (Griechische Synopse). cf. p. 87.  
『ディダケ』は1883年エルサレムで発見された貴重な資料。邦訳には『十二使徒の教訓』、佐竹明訳『使徒教父文書』所収、講談社1974年、他に『十二使徒の教訓』、ニコロ・タッサン編『古代教会の声』所収、聖母文庫1993年などがある。
- 4) Cyprianus, De Dominica Oratione. キュプリアヌス著・吉田聖訳『主の祈りについて』、『南山神学』第11号所収(pp. 1~41), 1988年2月。この本は、キュプリアヌスの他の著作『善行と施しについて』『死を免れないことについて』『背教者について』『カトリック教会の一致について』の5冊とも、上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成』第4巻「初期ラテン教父」所収、1995年出版予定。
- 5) ピエール・ジュネル『ミサ・きのう・きょう』ドン・ボスコ社1988年参照)。
- 6) 『カトリック大辞典』上智大学、富山書房1940年、「祈り」の項目中、「主の祈り」に関する箇所「II. 日常の祈りと信心生活」の項など参照。
- 7) (1)「新しい祈禱集『日々の祈り』に期待」〔東京・下井草教会・中村吉基(25), 『カトリック新聞』1993年12月5日号〕。

新しい祈禱集『日々の祈り』の刊行を大変うれしく思っています。先にミサをはじめとする典礼式文、聖歌、新共同訳聖書などがこれまでの伝統を踏まえながら現代語で生み出されていますが、特にミサ中の文語文と口語文の混合使用にアンバランスを感じていた者の一人として、今回の刊行を歓迎しています。ところで、一つお願いがあります。「主の祈り」についてですが、これは新たな訳なのでしょうか。または既存のエキュメニカル(教会一致)の立場で訳されたもの(統一訳、教会音楽訳など)を採用されたのでしょうか。もし、この「主の祈り」が独自の訳であるならば、さらにプロテスタントの方々とエキュメニカルな立場での訳を検討してみたいかなものかと思えます。

- 8) (2)「聖歌、祈禱文の口語訳について」〔長崎・俵町教会・鎌田晴公(72), 『カトリック新聞』1993年12月19日号〕。

ラテン語の聖歌はおごそである。文語文で歌うと、まだ厳しさが残っている。しかし口語文になると、中にはありがたみが薄れる場合があります。何でも分かりやすい口語にすればいいという考え方には、賛成しかねる。文語は、われわれの大事な文化遺産です。新しい祈りの本には、一番大事な主禱文の中で、「我らを試みにひきたまはざれ」が「私たちを誘惑に陥らせず」となっているようです。これでは、厳しさもミステリアスも薄れてしまう。せっかくプロテスタントと協力してつくら

れた新共同訳聖書でさえ、誘惑とは訳していないのに、どうして最先端の解釈をされるのでしょうか。

- 9) (3) 「主の祈り」口語文についての疑問〔福岡市・秋吉俊男・(年令不記載), 『カトリック新聞』1994年2月20日号〕。

「主禱文」は神から教えられた祈りと教えられ信じて祈っている者です。そこでこの度の『日々の祈り』の祈りの本は、今までの文語文を口語文に改めたことですが、その中の「主の祈り」の中で唯一翻訳が全く異なっていると思われる箇所があります。それは、今までの「われらを試みに引き給わざれ」が「わたしたちを誘惑に陥らせず」となっていることです。これについて、私の考え違いがあるかもしれませんが、つぎのように考えます。私は、「試み」とは、そのあとの言葉が“給わざれ”と敬語になっていることもあり、神からの試練と受け止めてまいりました。従って試練は究極は、本人を正しく導くための神の愛のむちでありますから、むしろ全力でこれを受入れねばならないことであります。人間は弱い存在だから、試みに引き給わざれと祈っていいよ、という神のはからいと感じておりました。しかし「誘惑」は悪へのいざないですから、悪魔からのものであります。従って、これから救ってくださいということは当然のことでありましょう。この点が全く異なる翻訳ではないかと考えます。

私は浅学にしてキリストが「主の祈り」をいかなる言葉で話されたものか知りませんが、アラム語とも聞いたことがあります。また英語では TEMPTATION(誘惑)となっており、TEST(試練)となっていないことは確認しています。どちらの翻訳が原文に忠実なのか教えていただきたくあえて筆を取りました。翻訳は昔の原文に忠実なのがよいのか、その精神を現代に合わせて正しく伝えるのがよいのかと言う難しい点がありそうですが、ほんとに大事なことと思いますので、ぜひしかるべき方の御教示をお願い致します。

- 10) (4) 「質問に答えて」〔雨宮懸(さとし)・東京教区司祭・(年令不記載), 『カトリック新聞』1994年2月20日号〕。

問題の箇所を逐語訳すると、「運び込むな/われわれを/中に/試練の」となります。「試練」と訳して置いた語(ペイラスモス)は、「試み」という意味にも、「誘惑」という意味にもなります。なぜ二つの意味が可能なのかというと、試練を受けている者がその試練を積極的に活用して信仰を証する機会にできれば、それは「試み」ですが、否定的に受けとめ過ちの機会としてしまえば、それは「誘惑」になってしまうからです。「主の祈り」の訳の違いは、解釈の出発点を動詞「運び込む」に置くか、名詞「試練(ペイラスモス)」に置くかの違いから起こると言えるかもしれません。

動詞「運び込む」を出発点にすると、神がわれわれを悪いことへと率先して運び込むとは考えにくいので、この試練は積極的な意味をもった「試み」であるはず。この場合には、この祈りによって、神が行う試みが程度を越えることがないよ



うにという願いが神に向けられたこととなります。これが文語文の「主の祈り」の立場だと思えます。

しかし、名詞「試練(ペイラスモス)」を出発点とする解釈も可能です。ゲッセマネでのイエスが、眠ってしまった弟子に「誘惑(ペイラスモス)に陥るな」と戒めたときのように、ここでも「誘惑」の意味に使っていることがありえるからです。その場合は、動詞を「運び込むのを許すな」の意味に取ります。神ではなく、第三者が行う行為であっても、神がそれを許し、放置していれば、現実の出来事となってしまいます。つまり、ここでの「運び込む」は、神が自ら行った行為を表すのではなく、第三者(たとえば、悪魔)が行うのを神が放置することによって、いわば間接的にそれにかかわった行為を表すということです。この場合には「あなたは第三者がわれわれを誘惑に運び込むのを許さないでください」という祈りになります。これが口語文の「主の祈り」の立場だと思えます。

どちらも可能ですが、ゲッセマネでの「誘惑に陥るな」とのつながりから考えると、後者の方がよいかもかもしれません。弟子がそうであったように、われわれも試練を「試み」にすることができず、「誘惑」としてしまふことがあります。このときにもまだ、神は祈ることをわれわれに求めているのだと思えます。

- 11) (5)「主の祈り口語文に対する疑問」〔福岡・今村教会・平田松雄(75),『カトリック新聞』1994年3月27日号〕。

2月20日付・声欄の「主の祈り」への質問は私も質問したいことでした。これに対して雨宮神父が詳しく答えられておりますが、小理屈のようでよく分かりません。ただ祈りの言葉が口語の典礼の言葉同様に大変幼稚になったことだと思えます。ミサに参加して唱えるのにおかしくさを感じることもあります。もちろん、実際には時代の変遷にともない学校の読本等も変わっております。が、公会堂祈禱文の祈りの言葉は大変洗練された文章の祈りであり、私は今だに御ミサの中で唱えている次第です。文語の「主の祈り」は、60年以上も唱えているお祈りですから、この祈りの言葉についてカトリック新聞で発表されたことは私たちの機関紙として、また多数の信徒の疑問に答えることとして当然だと思えます。

実は、昨年8月15日付一面に載った記事に関連して、主任司祭の義務、毎日曜日に小教区民のためのミサおよびミサ奉納金並びに「主の祈り」を唱える時、最後にアーメンを唱えなくなったことに対してこの『声』欄でぜひ、ご説明をいただきたいと思っています。これは私一人の疑問ではなく、『カトリック新聞』を読んでいない方2、3人から質問されたことでもあります。

- 12) (6)「主の祈りの口語訳に敬語を使用して」〔長崎・俵町教会・鎌田晴雄(年令不記載, 脚注8と同一人物),『カトリック新聞』1994年3月27日号〕。

2月20日付の新聞で、詳しい説明をお聞きしました。「誘惑」という言葉は普通、日本では男女の良くない関係や、せいぜい金に目がくらんだり、地位をほしがったりして罪を犯すくらいのところまでを指すようで、日常あまり使わない言葉です。

「試み」の方は、もっと意味が広く、例えばヨブが苦難にあってきたえられたように、あるいはわたしたちが天変地異にあった時に、神様助けてくださいと祈るような時に、「試みにひきたまわされ」という言葉は生きてくるものと思います。こちらの方が宗教的です。もちろんその中には罪に陥らないように、男女間の誘惑、金銭、地位のことも含まれていると思います。誘惑で済ませておけば誘惑にかかりさえしなければよいのではないかと、ということにもなりかねません。それでは積極的に善を求めよと励まされるキリストの教えが、にぶってくるのではないのでしょうか。「誘惑」はサタンのわざで、イエスは荒れ野において克服されました。

これから先、キリスト教が誘惑ばかりを気にするようでしたら、単なる世俗的な小さな倫理集団になりはしないか、と私は憂います。日本の信者は恐らく100年以上も「試み」と祈ってきたと思います。誘惑と試みと2つの立場がとられるならば、昔の通り、誘惑でなく試みを入れていただいた方が、毎日唱えている信者の励みになると思います。

- 13) (7)「われらの父よ」〔A. アレグリーニ神父・(文中に年令記載。67歳)・ミラノ外国宣教会、『カトリック新聞』1994年4月24日号〕。

日本のカトリック信者は「天にましますわれらの父よ」という言葉に親しんでいますが、司牧司教委員会が編集した『日々の祈り』では、口語の「主の祈り」の冒頭のところで、「われらの」という表現が消えてしまいました。マタイの福音書のギリシャ語原文にも、ヨーロッパのいろいろの言語の訳文にもその表現があるのに、なぜ、日本語の口語でそれが消えたのでしょうか。きっと、よく勉強なさった司牧司教委員会の司教様方に重大な理由があったと思いますが、私は、物足りない感じや寂しい感じを持たざるを得ません。「われらの父よ」と言うとき、私は全世界の人々が皆、神様の子供で、私の兄弟であると感じて、自分のために祈る恵みを兄弟のためにも祈ります。神が、私の父であると同時に、ほかの人々の父でもあると考えたら、神がその人々を愛して、彼らのための祈りを、必ず聞き入れてくださると確信します。私は今、67歳で、かわいい(?) 幼子だったときから、毎日この祈りを唱えてきたのですが、正直に言えば、初めから終わりまで気を散らさずに、それを唱えた覚えはありません。今は、本当に心から祈りたいとき、ただ「われらの父よ」という初めの言葉だけを、何回もゆっくり繰り返して、それを深く味わうようにしています。

- 14) (8)「神に『あなた』でよいのでは」〔宮崎・南宮崎教会・大川亀吉(73)、『カトリック新聞』1994年9月25日号〕。

神さまに「あなた」と申し上げることを失礼だと心配する人がいます。一応もともとだと思いますが、現代語ではあなた、お前、君の3語だけが単数の2人称代名詞ですから、ほかに言いようがないと思います。フランス語では、神に2人称の親愛語を用います。

日本ではカトリックとプロテスタントの聖書学者が18年もかけて訳した新共同

訳聖書をご覧になれば、祈りの中でも優れた祈りの詩編の中にわたしは心を尽くして感謝し、神の御前でほめ歌をうたいます。聖なる神殿に向かってひれ伏し、あなたの慈しみとまことのゆえに御名に感謝をささげます（138・1, 2）とあります。

学者の皆さんが納得して出版されたと思いますので、「あなた」でよいのではないのでしょうか。祈りは、神と親しく対話することです。多くの信者は「天のお父さま、あなたのみ名がほめたたえられますように、あなたのみ国がきますように、あなたのみ旨が地上でも行われますように」と唱え、「あなたを信じます。愛します。期待します」と神の現存を前に、祈っていると思います。対面ミサは食卓を囲む形です。聖像を背にしての無礼も心配ないと思います。形ではなく、深い祈りができるかにかかっていると思います。

- 15) 『吉利支丹文学集2』平凡社 1993 年参照
- 16) (2)～(8)までの文献は、(3)カトリック教会訳（明治 29 年、1896 年）を除いて、『日本語ヘクサブラ・六聖書対照・新約全書』、エルビス、1994 年参照。
- 17) ラテン語・英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語・スペイン語の順に両頁にわたって、各頁 3 か国語で「ミサの典礼文」が掲載されている。ヴァティカン市発行の小冊子、LAUDATE DOMINUM OMNES GENTES、参照（制作年不記載）。
- 18) ドミニコ会研究所編・本田善一郎訳『カトリックの教え』（ドン・ボスコ社、1994 年 7 月）の第 2 編、主の祈り（191～199 頁）参照。
- 19) 『家庭の友』中央出版社、1994 年 10 月号、8～9 頁参照。

## THE NEW “OUR FATHER”

— Some Thoughts from the Point of View of  
Comparative Linguistics and Patristic on the New  
Conversational Translation —

by Kiyoshi YOSHIDA

The September 1993 issue of *Hibi no Inori* (edited by the Japan Catholic Committee on Pastoral Care) printed for the first time a new Japanese translation of the Lord's Prayer. Even though it was expected that this new conversational Japanese version of the prayer would be readily accepted and used by families, circles, parishes, as well as individual Christians, opinions pro and contra concerning the translation were voiced by a variety of persons in seven contributions to the *Katorikku Shimibun* during the past year. So far (up until September 1994), no response was given by the Committee. Taking the opinions voiced as a starting point, and consulting some additional material, I have discussed problematic passages of the new translation in the following order.

1. I looked at historical aspects of the Lord's Prayer, including a detailed comparison with the Greek original, and a historical reflection on personal and communal use of the Lord's prayer within the Church.

2. Taking hints from a chronological review of the contributions to the *Katorikku Shimibun*, I decided to focus on especially two passages, “Father in Heaven” and “do not lead us into temptation.” By comparing these passages with nine other previous translations I found that 1) only the new translation omits “our” from the opening phrase; and 2) that the word used for rendering “temptatio” (*yuuwaku*) had been used in

earlier translations, together with two other terms (*kokoromi* and *izanai*).

3. A detailed grammatical comparison with seven other foreign languages (Latin, English, French, German, Italian, Spanish, and Portuguese) showed that 1) the word “our” is incorporated in the translation of all these languages; 2) that the equivalent of the Japanese verb (*Ten ni*) *mashimasu* is translated by using the grammatical form of the second person singular; and 3) that all translations except German have the Latin *tentatio* as the linguistic root of the word that is translated as *yuuwaku* (“temptation”) in the new Japanese version.

4. Taking the Church’s teachings and the patristic tradition (especially Cyprianus’ commentary on the Lord’s Prayer as basis, I explained the meaning of the invocation “Our Father” and the meaning of the petition “do not lead us into temptation.” Reference was made to Pope John Paul II’s *New Catechism* (1992) that emphasizes the importance of including the word “our” in the opening invocation of the Lord’s Prayer.

5. For the closing argument, I made some short comments on the contributions written to *Katorikku Shimibun* before proposing a tentative new translation of the Lord’s Prayer. This translation includes two corrections to the version proposed by the Committee: to add the word “our” (*warera no*) to the opening invocation, and to translate the “temptation” passage as “*watashitachi wo tameshi ni awasezu.*” Now, at its General Meeting in December 1993, the Japan Bishops’ Conference decided against the use of the new translation within the liturgy of the Church, especially during Mass. The reason given by those involved was what I have criticized above, namely the omission of the word “our” in the opening invocation. I think it would be good to correct as soon as possible an apparent deficiency of the new translation of the

Lord's Prayer: that it seems to be fitting for the private prayer of individual Christians but inappropriate when Christians pray together in the community of the Church.